

E-16 交替制勤務をしている婦人の生活と疲労

名古屋大理 〇永井ひろ美 名古屋大医 棚橋 昌子
愛知県大文 中田 照子 市卸学園短大 吉田 啓子

目的、夜間働く婦人労働者には多様な職種があるが、合理化などによって減少することなどが考えられない、しかも従来から婦人の専門職の一つとして位置づけられている看護をその代表的なものとして選び、その生活実態調査から疲労の状況を明らかにする。

方法、アンケート調査実施は1979年11月上旬であり、対象は名古屋市内の大学附属病院1、国立系病院1、自治体立病院2、日赤病院1、医療生協立病院2、医療法人立個人病院6、計13の病院を選んだ。抽出理由は、存立基盤の違いと、病院の性格から社会的な役割期待が異なるものを基準とした。回収率は85.2%である。

結果、日勤の場合は勤務前に疲労感のある者は少なく、勤務後に少し疲れを感じる者が多い。準夜勤、深夜勤の場合には勤務前に既に疲れを感じている者が多く、その上に夜勤を行い、更に疲労が追加される様子がうかがわれる。

一方、妻が働くことに対して反対している夫の数は少ないが、家事の多くは依然として妻の仕事になっており、家事労働の負担が職場での疲労に更にプラスしていることが想像される。